2009年度 修了

精神障害者小規模作業所施設長の悩みとそれに対する心理的援助の課題
― 施設長へのインタビュー調査からの考察 ―

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
清水　芳美

本研究は、精神障害者作業所の職員が有する悩みや問題意識に関する調査として、最もサポート体制が薄いと推測され、現場の責任者である施設長に焦点を当て、精神障害者小規模作業所施設長が抱える問題、ひいては現在の精神障害者が地域で生活していくために抱える課題を明らかにすることを目的とした。さらに、この調査結果から考えられる心理的に可能なサポートの課題を検討することを目的とした。

今までの精神障害者作業所に関する研究の多くは、利用者や作業所自体に関するものであり、そこで働く職員に焦点を当てた研究は少なかった。職員が多くのストレスを抱えた状況では、利用者のサポートにも影響しかねず、また職員の悩みには精神障害者作業所が抱える問題が反映されているとも考えられる。

本研究では、20代～60代の精神障害者小規模作業所の施設長8名に対して、作業所との関わりから現場における悩みや問題意識、対策方法に関するインタビュー調査を行い、悩みや思いの内容に着目した分析を行った。施設長の悩みや思いは、「環境」「人間関係」「内面」の3つのカテゴリーに分類された。さらに、それらを精神障害者施設に特有の問題と、障害者自立支援法に関する問題にも着目して分析した。

まず、精神障害者施設に特有の問題の分析結果を通して、精神障害者が地域で生活するにあたって、「自己管理」「主体的に生きること」「対人関係の在り方」「地域住民の正しい障害理解」の4つの課題が浮かび上がった。これらの課題に対して、小規模作業所職員は利用者一人一人の実生活に関わり、不安に共感しながら寄り添いそれを受け容れる姿勢、さらには、利用者と他者との関係を調整したり利用者とともに地域に働きかけたりする姿勢が必要であるということが考察された。

また、2006年に施行された障害者自立支援法に関する問題に着目した結果、この法律の特徴である利用者が作業所に来ることを重視した目に見える援助の考え方と、従来の精神障害者の特性に寄り添った援助の考え方が相容れないことが浮き彫りになった。そして、このような新たな考え方が蔓延すれば、本来行われてきた援助が失われ、職員へさらなる負担を招いてしまうことが危惧された。

さらに、仕事の特性として利用者の実生活に踏み込んだ支援が必要になる作業所職員は、利用者との関わりにおいて投影されやすく、逆転移も生じる可能性が高いと考えられる。本研究においては、8名中6名が組織内で何らかのソーシャルサポートを得ていた。しかし、情緒的なサポートも受けていると感じている施設長は3名に留まった。そのことからも、現状のサポート体制は十分であるとは言い難く、今後の施設長の心理的サポートの必要性が伺えた。